

くすりばこ

108.がん治療の今と昔

薬剤部 主任
矢留 徹



がん治療昔話

そう遠くない昔、あるところにいたある人のお話です。その人はやりたい仕事をして、趣味に時間を使い、大切な人たちと共に過ごし、それはとても幸せな生活を送っていました。

そんなある日、病気知らずで薬もほとんど飲んだこともないその人の元へ、健康診断を行った役所から受診勧告を示す通知が届きました。本人は元気であり、自分に何か異常があるなんて思っても見ませんでした。検査を続けていった先に待っていたのはがんの告知でした。

今までの生活が一変してしまうような衝撃を受けたことでしょうか。どうすればいいか？これは治るのか？何か予防をするべきだったのか？何がいけなかったのか？など様々な考えがよぎった先に医師からの提案で薬の投薬を勧められました。薬のことなど何も知らず、調べる術もなく、どうすればいいのか整理がつかぬまま時間が過ぎていきました。家族は治療を受けてほしいと考えていましたが、本人はあまりそうは思っていないませんでした。辛い治療などを進んで受けたいと思う人はいません。しかし周囲の説得もあり、不自由な選択の中で薬物治療を受けることを決めました。

治療開始後の点滴による副作用は本人の想像を超えたものであり、激しい嘔吐に加えて食欲が落ちていき、見る影もなく痩せていってしまいました。がんになってしまったのだから、痩せていくのはしょうがないと言いかせるように衰弱した体で日々を過ごしていきます。本人にしか分からない苦痛を家族が理解することは難しい問題でした。趣味に使っていた時間は治療へと費やされ、やがて入退院を繰り返しているうちに、病院で過ごす時間がより多くなっていきました。

こんな印象持っていますか？

抗がん剤治療は副作用が強く心身共に疲弊させるものである。そう考えている人は少なからずいると思います。これは一昔前のお話であり、現代医療の発展とともにいくつかの点が改善されているということの一部をここで紹介したいと思います。

副作用で初めに体感する代表的なものとして“吐き気”があります。吐き気止めの種類は増え続けており、がん治療を行う上での“吐き気”は、完全に抑えにいくことが現在の主流です。副作用はどんなものであっても個人差があるので、1つの吐き気止めを使って効果が乏しければ追加や変更をすることで抑えることを目標とします。

また、治療は外来通院で行っていけることが多くなっています。家で過ごす時間が増えることで行動の幅も広がり、趣味に興じることや人との時間を大切にすることもできます。

このお話と今との違いをもう1つ挙げるとしたら、それは医療体制の変化にあります。医師が診断し治療を決定する流れは変わらずですが、そこに看護師や薬剤師がチームとして介入し、治療をより確実なものへとするためのサポートを行えるようになりました。

薬剤師外来でやること、出来ること

薬剤師による初回の面談では、これから使用する薬の説明に加えて、患者さんのことを詳しく聞かせてもらっています。お住まいの状況や家事全般の担い手、内服薬は誰が管理しているのか、趣味や外出の頻度などを可能な範囲で確認しています。現代のがん治療においては、自身の生活を「いつも通り」過ごしてもらおうことにも重点をおいているからです。治療開始前に出来ていたことが出来なくなるということ、それが薬

による影響であれば別の薬で対応します。薬に薬で対応することに抵抗があるかもしれませんが、症状がある時だけに飲む方法や一定期間のみの服用で体調を改善していくことも可能です。

最初のお話の“吐き気”について言えば、点滴直後から出てくる吐き気と、24時間経過後に出てくる吐き気とで分類されます(気持ち悪くなることに変わりはありませんので細かく考える必要はないです)。体内に入った薬は異物と認識されて体により排泄・代謝をされていきます。つまり、時間

と共に薬は体から抜けていくため、日数が経過するほどに症状は落ち着いていくことがほとんどです。予め吐き気止めを使ってはいきますが、体から薬が出ていく時間に個人差があるため、長く体内に留まる場合や同じ吐き気止めを使っていたとしても追加で薬が必要になることがあります。ただ、それはその期間だけ服用することで解決できると考えられています。また抗がん剤ごとに吐き気以外にも特徴的な副作用があります。症状が継続してしまうこともあれば、体から抜けていくことで落ち着いていく場合もあります。

薬剤師はそういった細かな変化を聞き取らせてもらい、必要であれば対応する薬剤の追加を医師へ提案していき、副作用の体感を改善または軽減できるよう努めています。

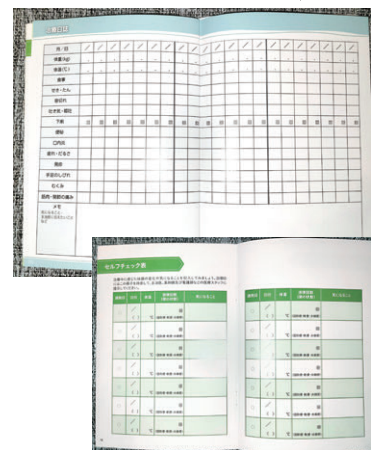
面談では、点滴をしてからどのような状態であったのかをお聞きしたいのですが、どうしても2~3週間前の事を正確に記憶できている人はほとんどいないと思います。そのため、治療を受ける方々には治療日誌の記帳をお願いします。いつどのような症状がどれくらい続いたかを記録し、次回の診察または面談時に持参してもらうよう協力して頂いています。この記帳をすることで、正確な情報が医療従事者側に伝わると同時に、患者さん自身も治療に対しての知識がついていきます。薬剤師外来での説明を通して理解を深めてもらい、積極的に関わってもらうことで、より安全な治療が確立されます。予測を立てられていれば、何か症状が出た場合でも冷静でいられます。自身の変化に応じて対応できることは、外来通院で必要なことの一つなのです。

このように日常生活の現状を確認することは治療を行っていく上で重要です。

薬剤師はその状況確認をしつつ薬の知識と照らし合わせ、必要な情報を医療チーム及び患者さんと共有するため面談を行っていきます。



↓ 治療日誌と
セルフチェック表



がん治療の今と昔

昨今のがん治療は新薬の開発や標準治療の改訂など様々な変化が訪れています。薬のことを何も知らない人であってもインターネットの普及によりあらゆる情報を得ることができそうですが、不確かな情報が多いのも実情です。副作用に関しては、薬の発展や様々なサポートを介すことで、かなり軽減できるようになっていると思います。しかしながら、告知を受けたときの衝撃や選択を迫られることについては変わりはありません。家族によるサポートは最も力になると思いますが、不安に感じる部分については医療従事者へ相談できるようにと当院では体制を整えています。その1つの薬剤師外来では、薬理的なことを知らない人にも分かってもらえるような説明を心掛け、寄り添った関係を続け治療を共にしていける役割を担います。今回は吐き気の印象を少しでも変わってみてもらえればと思い、このお話を書きました。疑問や不安がございましたら、患者支援センターへお越しください。